環境創造型農業／カネにならぬ価値求めて

谷口吉光（秋田県立大学）

「農業が環境を守る」という言葉は以前からあったが、最近は「農業が環境を創る」という言葉が使われるようになった。「創る」というのは「創造」のことなので、キリスト教徒が聞けば「農民が天地創造をするのか」と笑われそうだが、実際の意味は「環境をよりよいものにする」「生態系を復活させる」ということだ。秋田県内では 2001 年に大潟村が「21 世紀大潟村環境創造型農業宣言」を発表して以来「環境創造型農業」に取り組んでいるが、全国各地でこの言葉を冠した取り組みが広がっている。たとえば宮城県では「冬期湛水不耕起水田」（冬の間田んぼに水を張っておき、翌春に耕起・代かきをせずに田植えをするという農法）を環境創造型稲作として推進している。

なぜ「農業が環境を守る」のではなく「環境を創る」というのか。「環境を守る」といえば、環境への負荷を減らすことが目的となるから、農薬や化学肥料などを減らす取り組みが生まれるだろう。実際、これまで「環境保全型農業」という名前で行われてきたのは、多くの場合「減農薬・減化学肥料」の取り組みだった。

それに対して、「農業が環境を創る」という場合は「これまでの農業は環境をひどく破壊してしまった。農家はそれを回復する責任がある」という深刻な責任意識が根底にある。大潟村が環境創造型農業を宣言したのは、この村が八郎潟の自然環境を破壊して建設されたという事実を村民が認めたからにほかならない。もちろん失われた八郎潟は取り戻せないけれども、残された八郎湖を中心にして新たな自然環境を創り出すことを大潟村村民は誓ったということである。

しかし、農業が環境を破壊したのは大潟村だけではない。基盤整備・機械化・規模拡大・施設化などによって、どこでも何らかの形で農業は環境を破壊してきた。それは、突き詰めていえば、生産性向上や効率化を通して儲かる農業を追求してきた結果であった。

環境創造型農業という言葉が訴えているのは、環境という「カネにならない価値」を大事にしようということだ。たとえば、基盤整備や農薬によって田んぼにメダカがいなくなった。「米は売ってカネにできるが、メダカはカネにならない。だからメダカがいなくなっても仕方がない」というのはこれまでの考え方だ。それに対して、環境創造型農業は「メダカが田んぼに戻ってこれるように農業をやり方を変えよう」と考える。カネにならないメダカに価値を認めて、そのために行動しようというのだ。もちろんそれは農家だけで実現できることではない。農家以外の人々も「カネにならない環境の価値」を認めて、農家と一緒に行動する必要がある。だから環境創造型農業はどこでも始まる可能性があるし、どこでも始まってほしい。それは、高度経済成長期以来カネを求め、カネに翻弄されてきた私たちの生き方を変えるきっかけになるかもしれない。

（朝日新聞「あきた時評」　2004 年 4 月 3 日掲載分を加筆・修正した）